

関西学院大学 研究成果報告

2026 年 3 月 23 日

関西学院大学 学長殿

所属：文学部
職名：教授
氏名：小川 洋和

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☒ 特別研究期間 ☐ 自由研究期間 ☐ 大学共同研究 ☐ 個人特別研究費 ☐ 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	非人間化の知覚ダイナミクス：個人差および潜在学習からのアプローチ
研究実施場所	関西学院大学上ヶ原キャンパス
研究期間	2025年4月1日～2026年3月31日（12ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本研究課題「非人間化の知覚ダイナミクス：個人差および潜在学習からのアプローチ」では、社会的知覚における信頼性評価と人間性知覚のメカニズムを、潜在学習と個人差という二つの観点から検討した。具体的には、(1) 潜在学習を通じた文脈的連合が人物の信頼性評価に与える影響の実験的検討、(2) 非人間化が顔への視線パターンに与える影響の眼球運動計測による検討、(3) これらの研究を支える計算論的研究基盤の構築を行った。以下、各研究の概要を述べる。

第一の研究では、日常的な場所が潜在学習によって脅威的な意味を獲得し、その場所に現れた人物の信頼性評価に影響を与えるかを二つの実験により検討した(Ogawa & Horioka, in preparation)。先行研究では、犯罪現場や武器といった本質的に脅威的な視覚の手がかりを含む背景が人物の信頼性評価を低下させることが示されていた(Brambilla et al., 2018; Wang et al., 2020; Mattavelli et al., 2023)。しかし、現実の日常環境において場所の感情的意味は多くの場合、視覚的特徴から直接読み取れるものではなく、個人的な経験を通じた学習によって獲得される。ある街角が特定の個人にとって不安を喚起するのは、その場所で不快な経験をしたからであり、場所の外観そのものが脅威を示しているからではない。こうした学習された文脈的連合が人物評価に波及するかは未検討であった。

実験1では、参加者に日常的な背景画像（スーパーマーケット、公園、駅など）と脅威的エピソード（窃盗、暴行など）の想像的連合を形成させた後、同じ背景に提示された新たな人物の信頼性を4段階で評価させた。累積リンク混合モデル（CLMM）による分析の結果、脅威的エピソードと連合した背景に現れた人物は、中性的背景に現れた人物よりも信頼性が低く評価された。さらに、エピソード記憶の統合に関する予測を検討したところ、行為者本人が関連づけられた背景（self条件）では、他者が関連づけられた背景（other条件）よりも強い効果が中性人物において観察された。実験2では、脅威的エピソードの意図性（意図的加害／非意図的加害）を操作し、帰属過程の関与を検討した。帰属理論によれば、意図的な加害は行為者の安定的な性格特性に帰属され、非意図的な加害は状況要因に帰属される（Monroe & Malle, 2017）。この理論に基づけば、意図的脅威に連合した背景はより強い信頼性低下をもたらすと予測される。分析の結果、直接評価では予測通り意図性に応じた段階的差異が認められたものの、背景を媒介とした転移効果では意図的・非意図的脅威が同等の信頼性低下を生じさせた。この解離は、直接評価が帰属的推論を伴うのに対し、背景媒介的転移は時空間的近接性に基づく連合過程、すなわち評価的条件づけの拡散効果（Walther, 2002）によって駆動されることを示唆する。本論文は現在投稿準備中である。

第二の研究では、大学院生と共同で、非人間化が顔知覚の視覚的処理に与える影響を眼球運動指標により検討した。知覚的非人間化理論（perceptual dehumanization theory; Fincher et al., 2017）は、非人間化された顔に対して部分処理が優位になると予測するが、その再現性と範囲については議論がある。本研究では、加害者・被害者・中立のシナリオを顔と対提示し、EyeLink 1000を用いて1000 Hzのサンプリングレートで眼球運動を記録した。Chicago Face Databaseから選定した男性顔36枚を刺激とし、各条件12試行×6セッションの実験を24名の参加者に対して実施した。眼領域注視割合を確証的指標、視線遷移エントロピーを探索的指標として分析したところ、Fincher (2019) が報告した道德違反者に対する眼領域回避傾向は再現されなかった。一方、再認課題においてのみ、加害者条件および被害者条件の両方で中立条件よりも遷移エントロピーが低い傾向が示された。この結果は、知覚的非人間化が道德的主体に特異的な現象ではなく、顔に付随するネガティブ感情価に反応して生じる可能性を示唆する。本実験は予備的検討として位置づけられ、今後サンプルサイズを拡大した本実験の実施を予定している。また、共感性（IRI-J）、公正世界信念（BJW）、嫌悪感受性（TDDS-J）の個人差尺度を組み込んだ実験デザインにより、非人間化の視覚的処理における個人差の役割を検討する枠組みを整備した。加えて、EDFファイルの変換からAOI定義、品質管理、指標算出に至る包括的な眼球運動データ分析パイプラインをRで構築した。

第三に、上記および今後の研究活動を支える基盤として、人工知能を活用した研究エコシステムの構築に取り組んだ。大規模言語モデル（Claude、GPT-4等）をModel Context Protocolにより統合し、学術文献の自動探索・要約・知識ベースへの構造化登録を行うシステムを構築した。さらに、論文執筆支援、統計分析コードの生成・検証、Quartoを用いた再現可能な原稿作成ワークフローなど、研究の各段階を横断するAI支援体制を整備した。研究費はこれらのAIサービス利用料、クラウドインフラストラクチャ、文献管理ツール、および日本社会心理学会第66回大会（東京大学）における非人間化研究の動向調査のための参加費に充当した。

以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。